

メッセージアウトライン

ヨハネ18：28~40「この人ではない」

大祭司アンナスとカヤパの前での真夜中の尋問、ペテロの三度の否定。そのような出来事の後、ユダヤ人たちは今度はイエスをローマ総督ピラトの官邸に連れて行った。時は明け方になっていた。ピラトはローマ人、異邦人であるのでユダヤ人たちはその官邸に入って宗教的な汚れを受けて過越の食事が食べられなくなることはないようにと外に立ってピラトと交渉しようとした。(28) それで普通なら総督官邸の中で話を聞くはずのピラトがわざわざ門の外にいるユダヤ人たちの所へ出て行って話をするというかたちになった。(29) 「もしこの人が悪いことをしていなかったら、私たちはこの人をあなたに引き渡しはしなかったでしょう。」(30) 彼らは具体的な理由をあげることなくこのように言っている。

「あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい」(31)ピラトはこのように突っぱねた。しかし彼らは、「私たちには、だれを死刑にすることも許されてはいません」と食い下がる。実際、死刑の権限はローマ総督が持っていた。彼らが、死刑の権限がないと食い下がったことにより、イエスのことばが成就することになった。(32) →マタイ20:18~19, ヨハネ12:32~33 律法による石打ちではなく、ローマ法による十字架刑、これこそ神の取られた人間の救いの方法であった。→ヨハネ3:13~15, ガラテヤ3:13

ユダヤ人たちのことばを聞き、ピラトはもう一度官邸に入って、イエスに「あなたはユダヤ人の王ですか」と問うた。(33) 「あなたは自分でそのことを言っているのですか。それともほかの人が、あなたにわたしのことを話したのですか」(34)

政治的な王かメシヤとしての王か、ピラトの質問の意図するところがどちらかによってイエスの答えは違ってくるのである。しかし、ピラトはそんなことには関知しないで「あなたは何をしたのですか」と問いかける。(35)

「私の国はこの世のものではありません」(36) ピラトに対するイエスの答えから、この世の国と神の国の違いが教えられる。→マタイ13:31~32

そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか」(37)イエスはこのことを肯定され、さらに「わたしは真理のあかしをするために生まれ、このことのために、世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に従います」と言われた。イエスの国は武力や経済力で進展していく国ではなく、真理を証しし、そしてその真理に属する人が聞き従うというかたちで成長発展していくのである。ピラトは「真理とは何ですか」(38)と言いつつも、さらにイエスに聞くことをせず、その場から去ってしまった。ピラトはユダヤ人たちに対して、「あの人には罪を認められません」と言った。ピラトは自分の確信を持って一貫しようとして、ユダヤ人たちの合意を取りつけた上でそれをしようとした。(39)しかし、ユダヤ人たちの声は、「この人ではない。バラバだ」であった。(40)このバラバは強盗であった。→マルコ15:6~15 ピラトはユダヤ人たちの反感を買ってまでイエスを釈放する勇氣を持たなかった。彼は自分の保身のためにイエスではなくバラバを釈放したのであった。しかし、このようなねたみと殺意と人間的な思惑、駆け引きを通して神の救いの計画が着々と成就していくのである。私たちも十字架への道を雄々しく歩まれたイエス・キリストに従い、聖霊の助けと導きにより頼みつつ、この世に神の国をもたらすように励んでいきたい。